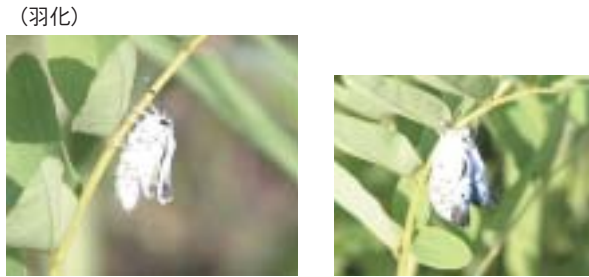


オオルリシジミの生態



(羽化) さなぎから羽化した成虫は近くの草に登っていく。止まって羽を伸ばしはじめる。羽が伸びきって乾くと飛び立っていく。



(交尾) 交尾。 (左み、右♀) 交尾した♀は翌日から昼過ぎ頃を中心に産卵。卵は、クララの花穂の蕾に1卵ずつ産み付けられるが、穂が小さい場合や、食草が少ない場合は一つの花穂にたくさんの卵が産み付けられる。



(卵) 卵は成虫の大きさに比べて小さく、約0.6mmのまんじゅう型をしていて、約1週間で孵化(ふか)する。



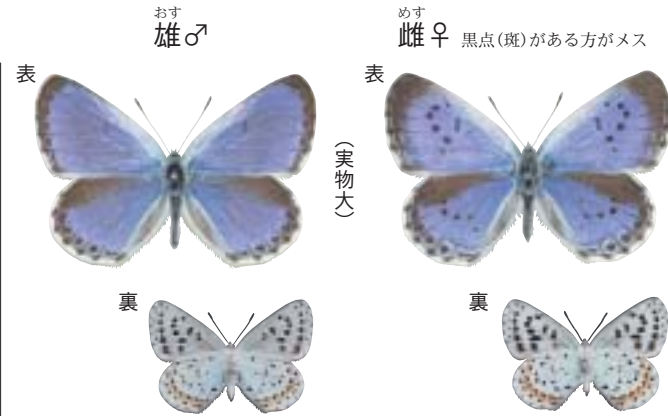
(幼虫) 幼虫は、つぼみの側面から頭を突っ込んで内部を食べて育ち、やがて花全体も食べるようになる。幼虫が分泌する蜜を求めて各種のアリがつきまとい、オオルリシジミとアリは共生関係を持っている。(アリは幼虫から蜜をもらい、幼虫はアリによって寄生バエなどの外敵から守られている)



(さなぎ) 約1ヵ月で終齢幼虫は20mm近くに育ち、晩期にはピンク色(写真右側の幼虫)になり、蛹化(ようか)するため茎を伝って地上に降りる。



蛹化はアリの巣近くの地表で行われ、草むらの土石の隙間などで蛹が見つかっている。夏に蛹化したまま越冬して、翌年の6月に成虫になって現れる。



おす雄♂ 黒点(斑)がある方がメス めす雌♀ (実物大)

年一回 約2週間の命
オオルリシジミは、5月下旬から6月初めにさなぎから羽化し始め、自然界に姿を現します。オスの方が生まれるのが早く、約1週間遅れてメスが羽化し始

めます。羽化は食草であるクララの生育に合わせたかのように花穂のつく初夏に行われます。そして、自然界に現れたメスはすぐに交尾をし、その後産卵を始めます。幼虫期間は約1ヵ月と比較的短く、7月には地上でさなぎになって夏、秋、冬を越します。羽の表の外縁の黒帯が太めで黒い斑点があるのがメス、黒帯が細く黒点がほとんどない方がオスと見分けることができます。オオルリシジミは1年に1回しか現れず、しかも生存は約2週間と非常に短い命です。

食草クララが生息に不可欠
オオルリシジミの食草はマメ科の「クララ」。クララは東信地方では「ゴウジゴロシ」とも呼ばれ、田の畦などにも生えていましたが、圃場整備などにより減少し、またかつて生えているのはため池の堤などに限られています。オオルリシジミの幼虫は、クララのつぼみや花だけしか食べません。そのため、クララがない所では繁殖できないのです。



クララの群生

第1章

オオルリシジミの生態を知る

オオルリシジミとはどんなチョウでしょうか。まずはその生態を知る必要があります。生態に詳しい清水敏道さんに聞いてみました。

全国では3圏に生息

オオルリシジミは、日本及び朝鮮半島に分布し、日本の本州では青森・岩手両県の東北地方、新潟・長野・群馬の3県にわたる本州中部地帯、九州の阿蘇・久住火山地帯の3圏に区分されます。

一方、中部地方では長野県の本曾、下伊那を除くほぼ全域と新潟県妙高高原、群馬県神津牧場(1950年代の記録)に生息していました。

しかし、80年代から県内の主要産地(塩尻市、豊科町、長野市、更埴市、上田市)でも個体数がどんどん減り、ほとんど見られなくなりました。

さらに90年代には、小諸市・北御牧村・立科町にかけての東信地域、穂高町・堀金村近辺の安曇野地域、新潟県の妙高高原でかろうじて生息が確認される程度となってしまうのです。

しかしながら、こうした地域へマニアが採集に殺到したことから、90年代後半には記録が途絶え、2000年以降は専門家の間でも自然観察できる所はな

各地で絶滅状態に

青森県など東北地方では、1978年以後の記録が全くないことから、この時点でオオルリシジミは絶滅したものとされています。

また、九州地方でも久住高原では同じく70年代後半に記録が途絶え、阿蘇山周辺のみ生息しています。また、80年代まで

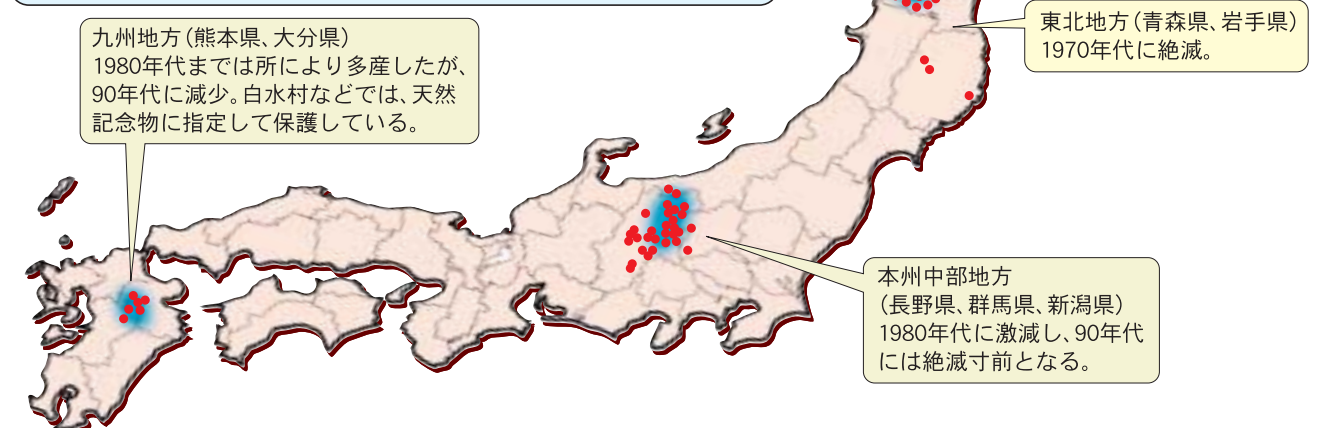
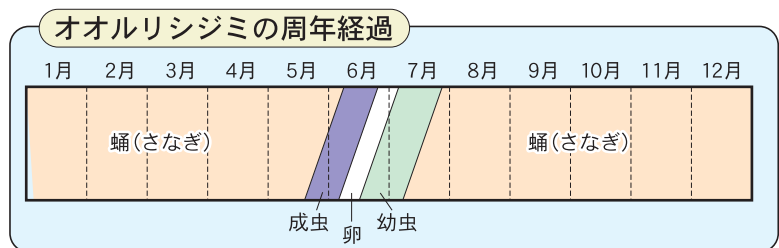
絶滅危惧 I類に分類される

現在、オオルリシジミは、IUCN(国際自然保護連合)の野生生物の生息状況についての新カテゴリーに準拠した環境省のレッドデータブック(RDB)において、本州産亜種・九州産亜種ともに絶滅危惧I A類(C

清水敏道さん(新屋) 日本鱗翅学会会員。オオルリシジミを守る会にも参加している。その他、高山蝶の研究もライフワークにし、写真展も開催する。



オオルリシジミ分布図



絶滅危機についてはクララの減少もその一つとして考えられています。絶滅寸前にまで追い込まれた原因については次ページで考えてみます。